



前回(2022年6月10日付) 寄稿したセネガル相撲に関する話題の中で、

「……セネガルには仕事のない若者が多い」と書いたところ、「仕事がないのに、なぜ生活していけるのか?」という質問を受けた。確かに疑問に思われるだろう。

実際のところ、セネガルの雇用率、失業率は深刻な社会問題となっている。あるデータによると、失業者の約60%が35歳未満の若者だという。大学を卒業しても企業に就職できず、日雇

セネガルの助け合い精神

ばすぐに始められる仕事だ。昼間に家の外に腰掛け、何もすることなく、ただポーンヤリしているよりは良いと始める人はいる。しかし、こうした仕事もできずにいる若者が多いのが実情である。

ではなぜ、彼らは生活していけるのか。これにはセネガル人の多くが信仰するイスラム教における義務と、「テランガ」という精神が大きく影響している。イスラム教において実行すべき五つの義務(五行)のひとつに、「ザカート」(義務的な喜捨)がある。自

発的な喜捨である「サダカ」と共に、困っている人を助けるという意識が信仰を通して人びとに浸透している。見知らぬ人も、相手も困っていれば自宅に招き入れ、食事を与え、ひと晩泊めることだってある。これが「テランガ」である。

「お互いさま」が

根づく社会

い労働や低賃金労働に従事せざるを得ないこともある。例えば路上での物売りは、売るモノさえ手に入れ



愛知淑徳大学 助教授 菅野 淑
ビジネス学部

る。「テランガ」は、セネガル人の国民性を表象する言葉だ。「おもてなし」と和訳されることが多いが、連帯や敬愛、親切、共有の意味も含まれている。セネガル人はこの言葉をとても大切にしており、行動の規範となっている。

例えば食事の場に出くわすと、食べている人から「どうぞこちらに来て、一緒に食べましょう」と声をかけられる。反対に自分の食事中に訪問者があれば、

かんの・しゅく 文化人類学、アフリカ地域研究。名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得後満期退学。1982年生まれ。

今日、自分が困っているならば、誰か助けてくれる人のもとに行けば食事ができ、眠ることができる。明日、自分がお金を持っていないならば、誰か困っている人に分け与えることができる。持ちつ持たれつ、こうした相互扶助があたりまえに、日常的におこなわれている。だからこそ、仕事がなくとも生きていくことはできるのだ。しかし、失業問題が深刻であることは変わりなく、セネガル政府も対策を講じてはいるが、大きな改善には至っていない。